

＜第5回日本レジャー・レクリエーション学会賞 奨励賞＞

英国 NGS オープンガーデンにおける自己目的性とチャリティー意識

下山田 翔¹

The self-purposefulness and realisation of charity in NGS Open Gardens

Sho Shimoyamada¹

1. はじめに

イングランドとウェールズでは、ナショナル・ガーデンズ・スキーム（以下 NGS）主催のオープンガーデンが毎年行われる。これは、庭園主が自身の私的な庭を公開し、自由に庭を鑑賞してもらうイベントである。1927年にNGSのかつての母体組織である、女王の看護協会（Queen's Nursing Institute）内に庭園公開を計画する委員会（Garden Sub-Committee）が組織されたことで始まったこのイベントは、ONIによって養成された看護婦（Queen's Nurses）たちの退職金を工面するためのチャリティー事業として創始され、入場料や茶菓から得た収益を寄付に回す制度は現在も変わっていない。

公開される庭園には富裕者が所有する大規模で華やかな庭園が少なくないことから、T. ヴェブレンが提唱した顕示的閑暇・顕示的消費¹⁾の性格が強いようにも思えるが、明らかにはなっていない。相田はNGSオープンガーデンについてその歴史とシステムについてまとめたが²⁾、“なぜNGSオープンガーデンに取り組むのか”について、また、NGSオープンガーデンが庭園主にとって“どんな意味合いを持っているのか”に焦点を当てた研究はない。そこで、本研究は庭園主の動機とNGSオープンガーデンのレジャーとしての性格を明らかにすることを目的とした。

2. フィールドワーク

2011年5月18日と19日に2庭園主、2011年

8月7日と8日に4庭園主に対して、半構造化インタビューとオープンガーデンの観察を行った。インタビューはICレコーダーにて録音し、トランスクリプトを作成した。庭園主に対しては研究目的でインタビューを行うことは伝えたが、研究内容を詳細に説明することは避けた。

公開日と庭園主の属性を把握するために専門のガイドブックである「イエローブック」を参照した。また、NGSオープンガーデンの歴史、寄付制度の変遷に関する情報収集には、女王の看護婦協会議事録（Minutes of the Queen's Nursing Institute）（1926-1976）と同協会年次報告書（Annual Reports of the Queen's Nursing Institute）（1977～1997）を参照した。

3. 調査結果

インタビューの結果、庭園主らは複数の動機を自覚していることが共通項としてあげられた。ある庭園主は、「チャレンジ」、「（チャレンジの成果を）見せること」、「チャリティー」の3つを動機として提示した。ここで着目すべきは、3つの動機は序列化されてはいなかったことである。他の庭園主らも複数の動機に優先順位を付けた者はいなかった。上述の点に加えて、インタビューをおこなったすべての庭園主がチャリティーについて言及していたことも、2つ目の共通項として挙げられた。チャリティーがいかに庭園主にとって重要な位置を占めているかをうかがわせたが、この点について、インタビュー結果と観察の結果には

1 エジンバラ大学、モーレイ・ハウス・スクール オブ エデュケーション
Moray House School of Education, The University of Edinburgh

差異があるようだ。NGSは各庭園から集められた収益を主に7つの団体に寄付しているが、各寄付先団体のポスターなどは庭園には設置されていなかった。博愛精神を啓発するようなメッセージも会場には見受けられず、庭園主と訪問客は歓談や茶菓やワインを飲食したり、花を愛でたりといった、オープンガーデン自体を楽しむことに終始している(図1)。活動やイベントが“それ自体のために”行われる³⁾、自己目的性がNGSオープンガーデンを特徴づけていると推察された。



図1 ワインを片手に庭園を鑑賞する来訪客

4. 寄付制度 (ACNO)

NGSは7つの団体への寄付の他に、庭園主が自由に寄付先を決定できる制度を採用している。Additional Charity Nominated by Owner (ACNO) と呼ばれるこの制度を活用し、庭園主は地域の教会など、自分に身近であり比較的小規模な団体や施設に寄付を行っている。図2は寄付総額と公開庭園数の年次推移にACNOの開始年(1979年)を縦線で示したもののだが、同制度導入後から年間寄付額が急増しているのが分かる。本研究では因果関係を主張することはできないが、庭園主に寄付の実感を与える点で、ACNOは重要な位置を占めているだろう。社交や植物の品評に終始するだ

けでなく、80年以上チャリティーイベントとして破たんせずに継続している要因はACNOにあると推論し、本研究は帰結した。

5. 受賞研究を振り返って

反省点を挙げると際限がないが、ここではフィールドワークにおいて、調査対象集団へ歩み寄ることの難しさについて振り返りたい。エスノグラフィーではしばしば“まなざし”が重要なテーマとなるが、研究者も調査される側から“まなざし”を浴びているはずだ。ロンドンにて庭園主に

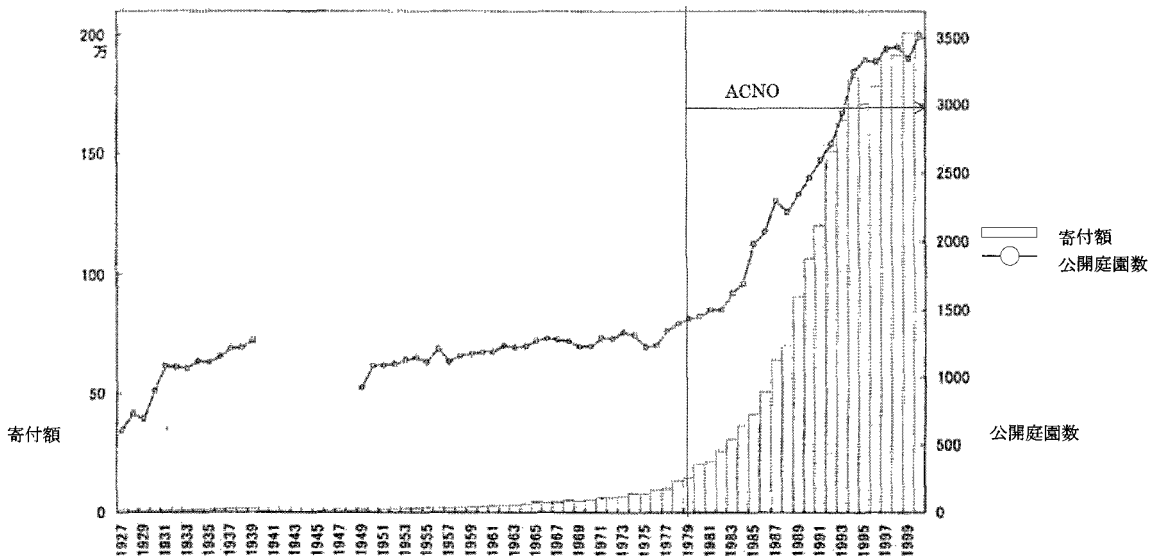


図2 寄付額と公開庭園数の年次推移 (1979年よりACNO導入)

注: 参考文献2)内にあるグラフに加筆した。

インタビューをした際には、植物に関する知識はほぼ皆無だった。研究をしに訪問しているのだから、レジャー動機についての知識があれば十分だという驕りがあったと思う。しかし、庭園主から見れば、研究者がインタビューをしに来たのなら、当然庭園や植物の事に詳しいと思うだろう。その結果、インタビュー中に庭園主が語る植物学的な話題にはついていけず、ある庭園主から失望されたのを強く覚えている。短いインタビューだったが、もっとオープンガーデン愛好家の気持ちを理解しようとする姿勢を示すことができたなら、さらに深く話を聞いたのではないかと省みている。

現在もこの研究は継続しており、奨励賞をいた

だけたことは、問題点を浮き彫りにする素晴らしい機会となった。この経験を存分に活用したい。

参考文献

- 1) ソースティン・ヴェブレン (高哲夫訳)：「有閑階級の理論」、筑摩書房、東京、1998
- 2) 相田明：英国と日本におけるオープンガーデンの発祥と展開、東京農業大学、2002 (未公開)
- 3) Sebastian de Grazia: *Of Time, Work, and Leisure*, Kraus International Publications, New York, 11-21, 1962

